図書紹介

藤川行平著『萬葉花暦』

妹尾好信

藤川行平氏は、長い間、広島大学の事務官として、その辣腕ぶりを発揮して来られた。文学部会計係長を勤めておられた頃には、ひとかたならずお世話になったものである。その氏が、附属中・高等学校勤務を最後に定年退職されたのは、平成七年十一月末のことであった。以後は悠々自適の生活かと拝察していたところ、日々『万葉集』の研究に没頭しておられる由を聞き及んで、大いに驚いたものであった。そして、この程、その研究成果の一部が早くも最初の著作となって上梓された。

藤川氏の『万葉集』研究歴は、すでに三十数年の長きに及ぶのだそうである。『萬葉花暦』と題された今回の本は、退職の記念に刊行されたもので、氏自身が「学術書ではなく学術紹介書として取り扱って戴きたい」と言われているように、研究論文集というわけではなく、随筆集のようなスタイルを取っている。しかし、そこには、氏の『万葉集』に対する蘊蓄の深さが十分に表われていると思う。

表紙に薄紫色で刷られた優雅な花車をあしらった瀟洒で品の良い装丁のハンディーな本である。その内容は、大きく三部に分かれる。

第一部は、書名になった「萬葉花暦」で、全体の三分の二近くを占める。『万葉集』に歌われた花や植物について、具体的な和歌を引きつつ簡にして要を得た批評・鑑賞を加えている。「あかね」「あさがほ」から「ゆり」「をみなへし」に至る二十九項目から成り、五十音順に配列されている。各項目とも、植物学的解説から始めて、万葉人の身近な植物に対する慈しみや親しみの気持ちが縦横に語られている。しかしながら、筆者の関心は、植物そのものよりもむしろ歌人たちの人となりに向かうことが少なくなく、しばしば万葉歌人論が展開されている。例えば、「あし」と「わらび」を取り上げては志貴皇子を論じ、「つきくさ」を巡っては家持の女性遍歴を語り、「はまゆう」にことよせて人麻呂の足跡を辿り、「まつ」に触発されて天武の皇子達の悲劇に思いをはせるといった具合である。本書が世によくある万葉植物考の類とは異なる所以である。

第二部は、「植物を慈しむ心――万葉人の美意識の下に――」と題されている。表題の脇に、「本稿は広島大学附属高等学校の植物班、園芸班、植物愛好会の、心優しい生徒達のために記したものである」とある。附属学校で定年を迎えた著者が、「教職員と生徒に、お礼の意を込めて、私のメッセージを残して去ろうと考えた」(編集後記)という本書刊行の動機から言って、生徒たちに向けて発せられた著者の重要なメッセージである。「萬葉人の美意識の背景」「在来植物と自然信仰」「渡来植物と外来文化」「在来植物と渡来植物と日

本文化』『植物を慈しむ心』の五章から成る。「随所にいろいろな植物やその植物の葉や花の色彩を賞で、変幻自在に移ろうて行く姿を見て生きてきた万葉人の美意識は、自然環境の中から生まれた自然神に対する信仰心と表裏一体をなして育まれて行った」とし、「在来植物は何らかの形で日本人の生活と密接な関わりをもってきた。縦えそれが雑草であっても往時の人々には農耕時期を、そして収穫時期を、また季節の移ろいを、また気象の変化をも予知してくれ、秋の収穫を待つこと、そして耐えることを教えてくれたのである」と、日本古来の在来植物が、日本人の精神や生活と密接な関係を持って来たことを指摘し、一方、「中国より朝鮮半島を経て日本にもたらされた渡来植物は、大陸文化をも背負って本邦へやって来たのである。渡来植物の移入は即ち人事の交流ということであり、文化の移入ということでもあった」と、大陸から渡来した植物が、大陸文化の日本への移入と連動性を持っていることを説いている。この両者を含めて、日本人の美意識の根底に流れるものは、「古代から継承されてきた、自然環境を始め動植物を思い遣る優しい心」であると、まさに著者が植物を慈しむように育み愛して来られた生徒たちに優しく語りかけるような調子で書かれている。

第三部は、「大伴旅人歌人論(試論)」(一)(二)である。これは本格的な歌人論として書かれている。第一部においても著者の関心が万葉歌人の人間像に向かいがちであったのは前述の通りだが、ここでは、大伴旅人を取り上げて伸び伸びと歌人論が展開されている。著者の歌人旅人に対する深い共感と思い入れが随所に窺われる力強い論であり、例えば、太宰府での憶良との交流に関して、「旅人文学は愛妻大伴郎女の逝去に伴う孤独感と虚無感、そして京に対する望郷の念から庶幾した憂いの副産物であり、その作品に於いて文学性を高めて行った過程には、憶良との相反した思想並びに思想的詞翰が織りなすそれぞれの調べを、双方が思想身分の枠を越えて尊重し、創作意欲を高めていった、人間性と文学的志向性にあったものと思われる」というような指摘は貴重であろう。憶良の「日本挽歌」を旅人に代わってその妻を亡くした悲しみを詠んだものと捉え、憶良の本質を代作歌人として、有名な「宴を罷る歌」も、「遅くまで宴会が続いていて早く帰りたい人を見、その人の気持ちになりかわり詠んだ」と解されるなど、憶良論としても興味深いものがある。後半において詳しく考察される「梅花謌卅二首」に関する論も、非常に具体的かつ説得的で、随所に新見を提示している。

入門書としてはやや文章が堅い感がなきにしもあらずで、出来ればイラストや写真を添えるなどレイアウト上の工夫も欲しい気はするが、ともあれ万葉の世界へ気軽に導いてくれる好著である。著者はすでに次回作『万葉鳥類考』の刊行を準備中であり、さらに『新古今集』や『百人一首』に関する論考も執筆予定と聞く。今後の研究の一層のご発展をお祈りする次第である。

《新書版、二七六頁。平成八年十月刊。私家版・非売品。連絡先＝〒七三四、広島市南区皆実町四―六―二六、藤川氏》